大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正三年五月一日發行第二卷第八號（大正三年四月三十日印刷納本）

近代思想

五月號

■智識的手淫（告白）……大杉榮（一）
■正氣の狂人（評論）……大杉榮（三）
■蜂と蜂との對話（對話）……荒畑寒村（六）
■障子を隔てゝ（對話）……荒川義英（一一）
■胡麻鹽頭（雜錄）……貝塚澁六（一四）
■『婦人解放の悲劇』（批評）……大杉榮（一六）
■子供の問（小話）……寒村（一八）
■喧嘩（小說）……德永保之助（二〇）
■アークヴアツドの仕事（小說）……佐藤綠葉譯（二三）
■新刊（紹介）……記者（三一）
■大久保より（消息）……記者（三二）

近代思想社

東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Asia Library
AP
95
.J2
K47
no.20

現代文明の進歩と趨勢の説明

▼編輯主任青柳有美先生

「最新智識叢書」

最新ポケット型
洋装假綴百頁
定價金二十錢
郵税金二錢

近來叢書の出版は、一の流行となつた。けれども、皆な文學書の梗概古典の抄譯であつて、現代文明の進歩と其の趨勢を説明するものは一つもない。日本人には、此の種の智識が乏しいから、是れを供給する事が、世界の現狀に照して今日の最大急務の一つである。本社は此の缺陷を補はんが爲には、最新智識叢書刊行を計畫し、博學にして眞摯なる學術研究者青柳有美先生を聘して、編輯の主任を託した。九月中旬以降續々出版する豫定である。敢て精神物質兩文明の研究者にすゝむ。

近刊五部

▲物質非不滅論（大杉榮譯）
▲最新兵器の發達（福永挽歌著）
▲歐米婦人運動の現狀（同）
▲最新結婚學（青柳有美著）
▲最新無痛安産法（青柳有美著）

續刊

▲アレキシス・カレル及び其効績
▲近代外科術の進歩
▲燃料としての石油及酒精
▲天才養成法
▲生命の起原新論

▲死後問題
▲シンヂカリズムの現勢
▲神經衰弱最近學説
▲二十世紀フランス文學史
▲美容術及びユーリズヱックス
▲結核及び最近治療法
▲タンゴー、露國舞踊、古典舞踊
▲未來派及び立体派
▲飛行機及び飛行船
▲地中海最古の文明
▲癌及び其のラヂウム療法
▲科學的夢判斷
▲社會進化の指導としての善種學

發行所　東京麹町區有樂町一ノ四　振替口座三四三三番　實業之世界社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

智慧と勇氣と幸福とに渴せる日本の思想界に薦む

文學士 阿部次郎著

三太郎の日記

●紙數六百頁布裝函入
●定價金一圓送費八錢

自己と人生とに信頼を失ひたる暗黒と疑惑の時代より、漸次にその信頼を恢復し、遂にやみがたき生命の渴望に向ひたる、三太郎の力強き心の開展の記錄なり。弱くしてやがて強き人間の心を示せる書なり。この書を愛讀するものは、純樸にして雄々しく熱烈なる、詩に近づかんとする人間の姿を見るべし。その他著者の人生と文藝に對する評論、隨筆、及附錄として若きゴオホ、ゴオホの藝術の二篇を添ふ。新思想界最初の烽火なり。

平塚明子序 伊藤野枝譯

婦人解放の悲劇

●菊半截三百頁 美本
●定價六十錢送費六錢

■附錄 エンマ・ゴルドマン小傳
エレン・ケイ小傳

婦人を解放せよ、婦人よ自覺せよ、といふ叫びは漠然と聞へる。けれども眞實なる解放とはいかなるものなるかに就て、我々は眞に理解ある忠告をきかない。この書、エンマ・ゴルドマン、エレン・ケイ二女史の婦人問題論四種を譯輯し、混沌たる日本婦人の前途に一道の光明を與へんとする者である。

發行所 東京市日本橋區檜物町九番地 振替貯金東京五六一四 東雲堂書店

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ラムスドス氏原著　佐藤綠葉氏譯

(最新刊)

小說 人間屠殺所

題名既に破天荒！而して其の内容に至つては、原著の發行後三月ならざるに十萬部を賣り盡し、八個國の國語に飜譯せられ、獨逸皇帝をして周章狼敗、國内に於ける其の發賣を禁止せしむるに至る。体を小說に籍ると雖も、實は數の人命を機械の犧牲とし、血を鐵丸に散らしめ、肉を爆藥に碎かしむる近世戰爭の酸鼻と殘酷とに對する空前の一大批判なり。秋霜烈日の如き定罪宣告なり。事實の淒慘、落想の警奇、心理解剖の精緻、將にアンドレイエフの『血笑記』と雁行するに足る。綠葉氏嚮に『近代思想』誌上に本篇を譯載せしが、今や新裝して江湖に出づ、乞ふ幸に愛讀を賜へ。

四六判洋裝美本
定價金六十錢
郵稅金六錢

東京神田南神保町　泰平館　振替東京二四八五九

平民詩人

内村鑑三
畔上賢造
共著

各定價金壹圓
郵稅金拾錢

肖像十六入

ホヰットマン、テニスン、ローヱル、ホヰッチヤ、ウヲルヅオス、ブライアントは歐米詩人中最も高貴の匂を有し、しかも最も平民的の詩人たちである。本書はこの六詩人の生涯と思想と、重なる作品とを評論し、紹介したものである。紹介は明晳である。評論は精嚴である。就中内村氏の、「ワルト、ホヰットマン」論は辛辣を極め、痛烈さ限りなしであるが、自由の空氣、純潔の思想、清高の情緒は、卷中に充ち溢れてゐる。裝幀は華美を避けて、燃ゆるばかりなる草色を用ゐて、詩人の氣分を漂はし、價格亦平民主義を發揮してゐる。

東京京橋尾張町　警醒社　振替東京[illegible]

213-442254

第二卷　第八號

智識的手淫

大杉榮

讀者諸君の多くもご同樣の事だらうと思ふが、寒村と僕とはもう、此の雜誌やうなのintellectual masturbation（こんな英語はあるかないか知らんが、譯すれば智識的手淫とでも云はう）にあきあきして了つた。吾々に情慾の、しかも極めて強烈な情慾のある以上、それは何等かの方法を以て常にもらされなければならぬ。masturbationも時によつては必須事である。けれども僕等は、僕等に取つての此の不自然事に、つくづく厭氣がさして來た。僕等の自然事に歸らなければならぬ。

此の意味から、僕等はもはや、今のまゝの『近代思想』の發刊を續けて行く事が出來なくなつた。形式も內容もまるで一變させなければ、もう承知が出來なくなつた。Bourgoisの青年を相手にして、譯の分らぬ抽象論をするかばりに、僕等の眞の友人たる勞働者を相手にして、端的な具体論に進みたい。なつかしき、しかしけがれたる此の『近代思想』は、第二卷を以て其の最後としたい。そして來る十月から、違つた名の、違つた性質の、新らしき雜誌として再生させたい。

僕等は、此の五ケ月の間、僕等自身の更生の準備をすると共に、又其の表白機關の物質的準備をもしなければならぬ。何よりも先づ保證金をつくらなければならぬ。

多分僕等は、次號の本誌で、此の計畫の多少の詳細を發表すると共に、猶僕等の同感者諸君、及び僕等の此の事業の同情者諸君に、幾分の御援助をこひねがふ運びに到り得ると思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

正氣の狂人

大杉榮

『へちまの花』第三號に、荒畑寒村近著『ショウ警句集』の批評が載つてゐる。僅か十行足らずのものではあるが、其の最後の一句が、ひどく僕の目についた。『寒村君の譯筆は既に世に定評がある』までは、いかにもみだし通りのお『提灯』である。しかし其の次の『ついでに一つこゝに警句を拔いておく、人間は最高の山頂までも攀登れるが然し、そこに永くは住めない』に至つては、見遁しのならぬ書振りである。

署名はしてないが、勿論これは堺利彦君の筆だ。そこで僕は、堺君の此の態度に對して一言すると同時に、此の機會を利用して、僕等自身の一主張、即ち僕の所謂正氣の狂人論を更に徹底させたい。

云ふまでもなく、あの最後の一句は、荒畑寒村に對する堺利彦君の皮肉である。最高の山頂まで攀登つて行かなければならぬことを常に主張し、且つ往々自ら其處に到達し或は到達せんとして、すぐ檬轉げ落ちて了ふ荒畑寒村が、其の自著の中に、自らの生活や主張を嘲笑するやうな態度の、斯くの如き警句をさしいれた事實上の皮肉を更に皮肉つたものである。

僕は今、あの皮肉好きの堺君が、ふと此の警句を見出して、それを此の皮肉の材料に使はうと思つた時の、如何にもうれしさうな顔付を、目前に見る事が出來る。そして其の瞬間の堺君の心理を甚だ賤しむ。

荒畑寒村のあの主張や生活は、同時に又、僕自身の主張であり且つ生活である。のみならず更に僕は、そして寒村も多分さうだらうと思ふが、總ての人がそして其の順序として先づ或る少數者が最高の山頂まで攀登らればならぬ事を、勸告し且つ强制したいのだ。從つて僕は、堺君のあの皮肉が寒村一人にさし向けられたとしても、更に僕が堺君に對して差出口をしなければならぬ僕自身の義務を感ずるのだ。

堺君のショウ好きは、思ふに、單に彼れの叛逆的方面のみでなく、又斯う云つた極く低級の皮肉的方面にも、大ぶ堺君と似かよつた所があるからである。僕は今、此の低級の皮肉と云ふ文字を、無理解から生じた皮肉の意味に使ふ。ショウは紳士閥社會に對する其觀察と批評とに於て、實に精緻と辛辣とを極めてゐる。けれどもショウは、多くの社會主義者と等しく、社會主義以外の若しくばそれに甚だ接近した新思想に對して、往々甚しき無理解を示し、又其の無理解から生ずる甚だ賤劣な皮肉を娛しむ癖がある。彼れの小論文『無政府主義の不可能』の如きは、彼れ自身が無政府主義的思想の斷片を常に口にし又筆にしながらも、猶且つ無政府主義と云ふ一歷史的理論に對する其の定心と無理解との、如何に甚だしきかを明示する好適例である。又彼れは『イブセン說の神髓』に於て、あれ程明瞭なイブセンの無政府主義に、即ち自覺せる個人の自由合意を以て組織する新社會の理想に、ケチをつけやうとして、爲めに此書の發行者たるタツガアによつて訂正の脚註を附せられてゐる。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

僕は、ショウのあの警句が何んな本の何んな場所にあるのか、知らない。從つて何を指し、何を意味するかも知らない。しかしそれは今問題ではない。要は只だ、堺君が自分の主張と多少違つた他人の主張に對して、しかも常に堺君に親近し又堺君を尊敬してゐる其の友人或は後輩の主張に對して、敢て其の主張の内容に深く立入る事をせず、ほんの上すべりの皮相的觀察を下して、僅かに冷笑と皮肉とを以て得々としてゐる其の態度にあるのだ。

それは堺君の寒村に對するこんどの態度ばかりではない。僕自身も亦、最近に於て屢々堺君の此の態度に會つてゐる。堺君は其の『胡麻鹽頭』に於て、數回僕の主張を批評した。曰く、あまりに英雄的である、曰くあまりに神秘的である。そして之れ以上には、それに附加せられた多少の皮肉の外に、殆んど何事も云つてゐない。英雄的若しくば神秘的の語は、堺君に取つては餘程の嘲笑の語である。然るに堺君は、只だ此等の嘲笑の語を放つただけで、殆んど何等の解剖をも僕の主張の上に加へてゐない。從來些かなりとも僕の主張の上に異論を挿はさむ者に對して、直ちにそれに食つてかゝつて行つた僕が、特に堺君の嘲笑に對してのみ殆んど沈默を守つてゐたのは、僕の親近し且つ尊敬する友人又は先輩の態度として、餘りに不親切な且つ餘りに陋劣な態度だと、半ば憤り、且つ半ば賤しんでゐたからである。しかし僕は、堺君の此の態度が思想上漸く堺君を離れかけてゐる他の友人又は後輩にも向けられて來るのを見て、從つて先輩としての堺君に對する尊敬が其等の人々の間に漸次薄らいで行く事實を見て敢て堺君に此の事を一言する。

素より僕等は、皮肉や嘲笑を怖れやしない。眞に僕等を理解した皮肉や嘲笑は、舷を叩いて、僕等も亦それに應じて、共に僕等自身を皮肉り且つ嘲笑したい。又始めから僕等を理解する事の出來ないものと僕等が認めてゐる奴輩の低級な皮肉や嘲笑に對しては、殆んど何等の痛痒をも感じない。けれども堺君は、僕等が十年あまり親近し、且つ尊敬し來たつた先輩である。今僕等が堺君に要求する所は、先づ僕等に對する眞の理解である。又此の理解から生じた教訓若しくば嘲笑である。そして堺君も亦其の友人又は後輩たる僕等に對して、之れと同様の希望を懷くべきである。

去年の三月、近代思想社の晩餐會で、島村抱月、相馬御風の二氏を招いた時、藝術と實行と云ふやうな話で、大ぶ議論を闘はした事があつた。其後抱月氏は其晩の感想を、例の講義的調子で、『文章世界』に發表した。僕も亦、其後發表した『生の擴充』の中に、其晩一寸口走つた實行の藝術と云ふ言葉の意味を明かにした。

『僕は僕自身の生活に於て、この叛逆の中に、無限の美を享樂しつゝある。そして僕の所謂實行の藝術なる意義も亦要するにこゝに在る。實行とは生の直接の行動であるそして頭腦の科學的洗煉を受けた近代人の實行は、所謂「本氣の沙汰でない」實行ではない。前後の思慮のない實行ではない。强ちに手ばかりに任した實行ではない。』

此の「本氣の沙汰でない」と云ふ句に特にカツコを入れたのは、其晩の議論の間に、僕の實行の藝術と云ふ語に多少反對らしかつた堺君の言葉であつたからだ。そして其次の『强ちに』云々の句は、抱月氏が實行を只だの腕力とばかり解してゐたやうなのに當つたのである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『多年の觀察と思索とから、生の最も有効なる活動であると信じた實行である。實行の前後は勿論、その最中と雖も、猶當面の事件の背景が十分に頭に映じてゐる實行である。實行に伴ふ觀照がある。觀照に伴ふ恍惚がある。恍惚に伴ふ熱情がある。そして此の熱情は更に新らしき實行を呼ぶ。そこにはもう單一な主觀も、單一な客觀もない。主觀と客觀とが合致する。これがレヴォリユショナリーとしての僕の法悦の境である。藝術の境である。』

僕は、僕の實行がいつでも此の種の實行であると云ふ事は出來ない、又僕の此の種の實行が、いつでも此の文に現はれた如き偉い實行だとも、云ふ事は出來ない。けれども僕には、此種の或はそれに近い實行の經驗が、既に幾度か味はれた。

『且つこの境に在る間、かの征服の事實に對する僕の意識は、全心的に最も明瞭なる時である。僕の自我は、僕の生は、最も確實に樹立した時である。そしてこの境を經驗する度毎に、僕の意識と僕の自我とは、益々明瞭に益々確實になつて行く。生の歡喜があふれて行く。』

かの征服の事實に對する時ばかりではない。僕の生の直接の行動たる實行には、意識的實行の時は勿論、無意識的實行の時にも、其の最中か其の直後か或は稍經ての追懐に於て、僕は此の種の經驗を、既に幾度か味はつた。

此の經驗は僕の正氣の狂人論の一基礎である。僕は此の生の法悦を味はんが爲めに、最も確實に樹立した自我の充實を得んが爲めに、即ち生の最高の山頂に攀登らんが爲めに、正氣の狂人論を主張したいのだ。そこに永く住めない事は、今の僕に取つての問題ではない。幾度轉げ落ちてもいい。要は只だ、幾度でも其處へ登つて行きたいのだ。其處へ登つて行く努力だけでもしたいのだ。

此の努力は、此の行爲は、しかも自己の生の擴充の爲めに一切の權威と障礙とに叛逆し、突進して行く者の此の努力と此の行爲とは、習俗者から觀れば、又習俗から脱け切らぬ者から觀れば、多くは狂人の努力である、狂人の行爲である。本氣の沙汰でない行爲である。けれども僕は、此の狂人の行爲を、本氣の沙汰で、正氣でやり遂げたいのだ。

いつかの僕の短文『野獸』は、此の所謂狂氣の沙汰を、まだ〳〵思ひ切つて實行する事の出來ない僕自身に對するいましめであつたのだ。

僕は大ぶ自分の古い文を引用した。そして自分でそれに註釋を加へた。しかしそれは、先きにも云つた如く、あの文の中にある僕自身の經驗が、僕の此の正氣の狂人論の一基礎であり、且つ此の基礎を土臺としなければ、僕が此の論をやる順序として缺くる所あるからである。そして僕は、此の論の讀者諸君に對して、更に僕の主張を明かにする爲めに、先きに云つた僕の諸論文を參照せられん事を願ふ。

ベルグソンは其著『意識の直接與件』の結論の中に、次の意味の事を云つてゐる。

『二つの違つた我がある。其一は他の外的投影、空間的表現、又、謂ば社會的表現のやうなものだ。吾々は深い反省によつて此の第一の我に到達する。しかし吾々が此の吾々自身を捕へる瞬間は稀れだ。そして此故に吾々はめつたに自由でないのだ。吾々は大部分の時間を吾々自身とは外的に生活する。吾々は吾々の我の色あせた幽靈のみ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

しか認めない。吾々は吾々の爲めによりも寧ろ外的世界の爲めに生活してゐる。吾々は吾々自身の思つてゐるよりも餘計に語る吾々は吾々自身の行動するよりも餘計に行動させられる。自由に行動するとは、自己を所有する事である、純粹持續の中に我々自身を置く事である。』

猶この心理作用を眞に理解する爲には、等しくベルグソンに據れば、『吾々が或る重大な決心を爲すべく選んだ吾々の生涯の瞬間、其の類に於て唯一なる瞬間、又其の歴史の過ぎ去つた時機が其の國民の爲めに再來しないと同じく、再び現はれる事のない瞬間を追懷』しなければならぬ。

只だ之れだけの一節を書き拔いただけでは、あまりに漠然過ぎるかも知れぬ。しかし僕の議論の筋道としては、只だベルグソンが斯う云つてゐると云ふ事を、ぼんやりでもいゝから頭にいれて貰へばいゝのだ。

そして猶、一時センディカリスムの父とまで呼ばれたヂョルジ、ソレルの著『暴力論』に據れば、此の自由は、吾々が吾々自身を閉ぢこめてゐる歴史の框を破つて、吾々自身の中に、一新人を創り出さうとする努力の中に、殊に吾々の享け得べきものである。

僕は此の第一自然が捕へたいのだ。其類に於て唯一なる此の瞬間を捕へたいのだ。此の自由を捕へたいのだ。此の生の最高の山頂に攀登りたいのだ。そして僕は、此の瞬間を僕の所謂正氣の狂人的行爲の中に、此の崇高なる實行の藝術の中に、既に屢々見出し、又常に見出され得るものと信ずるのだ。幾度轉げ落ちてもいゝ。只だ幾度でも此山頂へ登つて行きたいのだ。其處へ登つて行く努力がしたいのだ。自分ばかりではない。他人にも又、此の努力と行爲とを、勸告したいのだ、强制したいのだ。これの出來ない奴輩は、又これを爲さうとも思はぬ奴輩は、僕の所謂衆愚だ。歴史の創造に與らない怠惰者だ。

僕は更に此の正氣の狂人論を、堺君や僕等が等しく社會的仕事としてゐる勞動運動の上に考へて見たい。

此處に一ストライキが起るとする。僕は此のストライキを以て、ベルグソンの所謂『吾々が或る重大な決心を爲すべく撰んだ吾々の生涯の一瞬間、其の類に於て唯一なる瞬間』としたいのだ。平凡なストライキではない。安閑として只だ腕組許りして居るストライキではない。本當に勞働者が重大な決心を要するストライキだ。

即ち、巨額の維持金をかゝへて、永い間平穩無事に其の腕組を續けて、之れによつて一般社會の同情を得て、そして最後に政府者側の干渉をして勞働者の利益に終らしめんとするやうなストライキではない。維持金も何もなしに、短かい時間の間に、勞働者のエナアヂーをエキステンシフでなくインテンシフに集中した、本當に勞働者が重大な決心を要する、正氣の狂人的ストライキだ。勞働者のエナーヂーと自信と個人的勇氣と發意心とを、其の最高潮に到らしめるストライキだ。

若し總ての勞働者が、斯くの如き極力的戰鬪をする事を拒み、又斯くの如き生の最高の山頂に攀登る事を拒むならば、勞働者は永遠の奴隷である。

生の最高潮に上りつめた瞬間の吾々は價値の創造者である、一種の超人である。僕は此の超人の氣持が味いたいのだ。そして自ら此の瞬間的超人を經驗する度數の重なるに從つて、一歩々々、此の種の眞の超人となる資格が得たいのだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

蜂と蜂との對話

荒畑寒村

暖かい春先のことで、カアニオラ種の蜜蜂と、日本種の蜜蜂とが、互に蜜を求めて花から花へ飛び歩いて居る間に、バッタリ出つ會した。その對話。場處はとある花多き野原。

日本蜂

素晴しい野原だ。素晴しい花だ。どうだい、金盞花、鋸草、アスター、紫雲英、目も醒めるやうじやないか。あの細い流れを超して、向ふの畑に咲き亂れて居る蕓薹、蘿蔔、京菜、豌豆。織物だ、美しい絨氈そつくりだ。そして是が皆な、甘い蜜を大切そうに、俺達の爲に持つて居るのだ。俺が此の嘴を、あの優しい花の唇に觸れさせると、その甘露のやうな蜜をトロリと、俺の口へ流し込んで呉れるのだ。あゝ、俺達は何といふ幸福なこつたらう。私共を飼ひ、私共を治め、私共に蜜を集めさせなさいます人間樣、御主人樣。こんな結構な、花の澤山ある、蜜のこぼれそうな、立派な野原を下さいまして、有難う存じます。イタリアン蜂や、サイプラス蜂や、カウカシア蜂や、獨逸蜂に荒されないで、此の野原を日本蜂だけで獨占出來るのは、全くあなた樣のお蔭でございます。

フト眼を上げると、カアニオラ蜂が、紫雲英の花に止つて、うまさうに蜜を吸つて居る。

日本蜂

やい、誰だ手前は？太え奴だ！。俺達の野原へ、無斷で這入つて來るさへあるに、蜜まで吸ふとは何事だ。此の盜ッ人め！

カアニオラ蜂

誰でも無い、カアニオラ蜂だ。名前や形こそ些しは異つて居れ、虻でも無けりや蠅でも無い、お前と同じ蜂だ。何で此の野原へ入つちや惡いのだ。

日本蜂

カアニオラ蜂だ？、じや手前は俺達の敵だナ。敵國の奴だナ。何故惡いかも、蜂の頭もあるものか、何だつて、俺の領分を侵略するんだ。

カアニオラ蜂

侵略したんでも、攻擊したんでも無い。俺は只だ、此處へ蜜を求めに來たゞけだ。見ろ、此の美しく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

咲き誇つて居る花を!。是は無目的に野原を飾つて居るんじや無い、蜜を求めて歩く俺達を、誘ひ招く爲めなんだ。そうして、俺達には蜜を呉れる代りに、その花粉を花から花へと運ばして、生殖を計る爲めなんだ。彼等は俺達が多勢來て、澤山蜜を吸ひ、また澤山花粉を運ぶ事を希つて居るんだ。俺は別にお前の邪魔はしない、俺は紫雲英を訪ふから、お前は金盞花でも、アスタアでも漁るがいゝじやないか。それ共、俺はお前に敵と呼ばれるやうな、害をした事があるか。

日本蜂

害はしないでも、異種族の奴は皆な敵だ。いま俺達を害さないでも、何時かは必ず害するんだ。それも殘酷な、暴虐な、非道な仕方で、俺達の國家を劫掠するに定つて居る。俺がまだ幼蟲だつた時分、父母は既にそう云つて聞かせた。それから、學校へ行くやうになつてから、先生もそう云つて聞かせた。敎會の坊さんもそう說敎した。敎科書にも新聞にもそう書いてある。そうして兵隊に往つてから、俺はもうすつかり、その考へで頭を固められて了つた。こらやい、カアニオラ。俺の國では、壓制者を殺す事は罪惡になつて居るが、異種族の蜂を殺すのは、名譽とされて居る事を知らないか。

カアニオラ蜂

吸血鬼!。それが、お前達の敎育といふものなのだ。海綿のやうな幼蟲の腦に恐ろしい嘘を注ぎ込んで、それから血氣盛りの若者となる迄に、學校や、敎會や、敎科書や、新聞が、寄つて集つてその嘘を助長し、そうして最後に、軍隊が仕上げを掛けるのだ。そんな事は、皆な恐ろしい嘘だ。幻想だ。愚ろかな迷信に過ぎないのだ。見ろ、向ふの畑を!。カウカシア蜂や、イタリア蜂や、バナツト蜂が、皆な仲よく思ひ思ひの花を飛び廻つて居るじやないか。

日本蜂

いゝや、嘘じや無い。成程、個人と個人とは仲よくして居られるかも知れぬ。然し、國家と國家とは何時も敵同志だ。何時も、密かに螫針に毒を塗りながら、陽べで握手して居るのだ。

カアニオラ蜂

それは、勞働者と勞働者とは、何時、何處でゞも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

仲がいゝのだ。只だ資本家同志、即ち國家同志が、何時、何處でゞも敵なのだ。何故なら、何時でも掠奪され、利用され、壓制されて居る勞働者は、種族と、國籍と、名稱との如何に拘はらず、同じ苦悶、同じ不平、同じ要求、同じ目的を持つて居るからだ。だが、資本家同志は利害を異にして居る。カアニオラ種の利益は、日本種の害惡であり、バナット種の得は、獨逸種の失であるのだ。此の野原にしても、お前の蜂群と、俺の蜂群とが、一度に押し寄せて來たつて、此處の花は爭ひを起す程すくなくは無い。然し、お前の蜂群を飼つて居る人間と、俺達を飼つて居る人間とは、即ち兩種間の資本家は、此の蜜に富んだ野原を獨占しやうとするから、俺達平民勞働者を使唆して戰はせ、爭はせ、相殺させるのだ。そうしてその目的の爲めに、平素から異種族を敵と思ひ込ませ、愛國心を養成させ、蜂殺しの術を練習させるのだ。

日本蜂

然し、然し、俺達が若し他の人間に飼はれたとして見ろ。俺達の持つて居る自由や、權利は、皆な奪はれて了ふに違ひない。それ處じや無い、俺達は自分の國語で話しをする事さへも、禁ぜられて了ふだらう。

カアニオラ蜂

だが、一体、君達に自由だの、權利だのといふものがあるか。君達は何の爲めに、春先から秋にかけて、毎日のやうに花を訪ねて野山を飛び廻るのだ?。蜜を得たいからだらう。蜜を集めて、或は巣を作り、或は幼蟲を養ひ、或は越冬期の食物に充てる爲めだらう。然るに、人間と稱する資本家があつて、諸君を飼ひ、諸君を働らかせ、そして切角諸君の貯めた蜜をば、僅かに勞働者が餓死しない程度の、少量だけを與へて、後は皆な彼等の手に奪つて了ふ。君、辛うじて餓死を免かれる自由と、掠奪される爲に勞働する權利となら、何種の主人に飼はれやうと保てるよ。また、一割しか呉れない蜜を二割取り、乃至は越冬中に砂糖をもつと入れて貰ふ自由とか、權利とかいふのなら、それを保つ保てないは、主人の如何には關係しない。勞働者が奮起し、叛逆しさへすれば、必ず得られるのだ。

日本蜂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

そう云や、或はそうかも知れん。が、兎に角俺達は生れ乍らにして、自分達の國土と自分達の同胞とを愛する感情を持つて居る。だから、俺達の國土が他國の領土となり、同胞が他國の資本家に使役され、他國の政府に支配されるのは堪へられないのだ。それは不義だから、また罪惡だからだ。

カアニオラ蜂

その、諸君の權利や、自由を、侵害壓制するものの不義、罪惡に對して憤ほる君が、何故、日野君の權利や自由を侵害壓制して居る者を默認し、彼奴に服從して居るんだ。幽靈を擔ぎ出して、嚇かそうとしたつて駄目だよ。吾々にとつては、日本種だらうが、カアニオラ種だらうが、獨逸種だらうが、そんな事は問題にならない。勞力を悉く掠奪されて居る限り、その自由が奴隷の自由、その權利が餓死の權利に過ぎざる限り、此の主人に飼はれて居ると、彼の主人に飼はれて居ると、何の相違差別があるか。吾々が骨を折つて集め、貯めた蜜の掠奪者が、誰れであらうと、吾々勞働者にとつては何の變りも無い。敵！敵！と云つて、何時も恐ろしがるのは、ほんとに奪はるべき物を持つて居る資本家の云ひ草だ。有り難い事には、吾々勞働者は生命の外、何一つ財產と云つちや持つて居ないのだ。皆な敵より先に、こつちの御主人に奪はれてしまつてネ。

日本蜂

すると、取り返す段になりやア、敵から取るのもこつちの主人から奪ふのも結局同じことか。然し、カアニオラ君。君の云ふ通りにすると、吾々勞働者は、誰に飼はれやうと、誰に征服されようと、只だ手を束ねて默つてりやいゝといふのかネ。

カアニオラ蜂

どうして、誰がそんな馬鹿な事なんぞ云ふものか。只だ戰爭といふ者は、飼ひ主即ち資本家同志の利害の衝突から起るもので、吾々勞働者は常にその犧牲に供されるに過ぎないのだから、そういふ時は、決して戰爭をするなといふのだ。例へば、此の野原だ。君が僕を追ひ退け、或は鏖し殺して、此處の花と蜜を獨占したとしても、その利益は單に君の飼ひ主の手にしか歸せぬ。だから戰はず、爭はないで、仲よく花を訪ひ、蜜を吸はうじやないか。そして切角勞苦して得た此の蜜を ムザ〳〵

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

怠惰な、盗賊に等しい飼ひ主に奪せて了はないで、吾々が皆な一致團結して叛逆を企て、吾々の生產した物を彼等から奪ひ返そうじやないか。是れが吾々の執るべき最も合理的な、唯一の手段なのだ。かうして、凡ての蜂群が皆なその飼ひ主の束縛を脫すれば、もう何も何處も攻めて來やしないかの、誰が攻擊しやしないかのと、尻の螫針を現はして、ビク／＼して居るにや當らないよ。

箴言

寒

■近世の教育とは、知らなければならない物の外、有ゆる物を知るといふ事である。

■政府は卑怯である。それは人間の中に在る樂しい物、美しい物を悉く破壞して、然も世界の舌を恐れる。

■最も見易い事なのに、人々が最も發見に苦しんで居る事がある。

■ザラトウストラは曰く、『何事か云はんと欲する者は、久しき間沈默を守る。』噫、若し輿論の製造者にして、生涯此の訓言を守つてさへ呉れたら。

■適者生存といふは當らず、兇者の生存、惡者の生存のみ。

新刊紹介

■紅あざみ（尾島菊子著）

年增の女と、年下の男との戀愛を描ける小說にして、裝釘、箱、共に美麗なり。（金一圓、麹町區有樂町三の三日比谷書院）

■モオパッサン傑作集（馬場孤蝶譯）

モオパッサンの短篇六、即ち『親殺し』、『初雪』、『月夜』、『鐘の音』、『負債』、及び『月影』、並びに『モオパッサンの紀行』と、『小說論』と題する一論文を添へてある。

モオパッサンはその師フロウベルから、如何なる小さき物の裡にも、人の未だ知るざる所あるものなり。われ等は是を發見せざるべからず、此の如くにして、吾等は獨創の見を發揮し得べきなりと云ふ訓言を聞き、且つ服膺したといふが、此の六つの短篇小說は、此の訓言に基いた努力の結果に非ざるは無い。彼は『親殺し』では、孝道と稱する絕對的道德に對する疑義を公けにし、個人の自由、幸福、權利に加へられた不正に對する復讐、即ち殺人の正義てふ問題を、法廷と社會とに突き付けてその返答を要求して居る。『初雪』では夫婦間の趣味、躰質、性癖の差異に對する無理解が、如何に悲慘なる結果を生むかを、『月夜』では、僞善と形式との桎梏から人間の心を釋放して、自然と溶合させる戀愛の力を、『鐘の音』では、淫賣婦の心に潛める獨立と自由と無限の矜誇とを、『負債』では同じく淫賣婦の優しい同情と、熱い義俠心とを、而して『月影』では、戀を戀する女の微妙な心理を、暗中の火花の如き銳い、短かい、明らかな言葉で描いて居る。凡て是を貫くものは、人間感情の流露と、人性に對する同情的了解である。

『モオパッサンの紀行』、『小說論』、何れも有益な文字である。（寒）（金八十錢、日本橋區下槇町如山堂書店）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

障子を隔てゝ

荒川義英

（青年、机の前に横むきに坐つて若い女と話してゐる、正面障子を隔てゝ玄關の心地、障子の向ふに聲あつた瞬間）

青年。何方です？

障子の向ふの聲。私です。松田です。

青年。今日は失禮致します。

障子の向ふの聲。お忙がしいんですか。

青年。お忙がしいかつてお聞きですか？、そうですねえ、忙しくもあります。

女。（低聲）誰？何て方なの、何て方？

青年。（低聲）なあに牧師ですよ。敎會の牧師ですよ、松田と云ふ。

牧師。（無論障子の外で）何方かおいでなのですか、若しお差支なくば少々御邪魔致させていたゞきませうか。

青年。甚だ申し兼ねますが今日は是で失禮します。

牧師。勝だ勝手な言ひ分ですが、おいでの方は御婦人のやうでございますが、若しお差支なくば私の方は……

青年。そうです、女がゐるんです、ですから何うも貴郎がお入り下さると少々困るんです。

牧師。ですけれ共、無遠慮な言ひ分ですが、折角遠くから神樣のお引き合せでやつて參つたのですが、——貴郎は今日何うかなさいましたか。

青年。何うもしませんが、唯女がゐるもんですから少々弱ります、散々汚してありますから却つて失禮かと思ふんです。

牧師。否え、決して。私等は兄弟のお宅へ上つたのは世のそれのやうな御氣嫌伺ひでもなければ、俗惡な利害關係の用件でもありませんのですから室の片づけ方なぞは少しも差支ございません。決して。

青年。あつ！開けて下すつては困ります、大低の散らけやうぢないんですから。

女。（低聲）少し片づけませうか、あんまり非道いわこのまゝぢや。（顏を見合せて笑ふ）

青年。大丈夫だよ、誰も上りやしないんだから、構はないかそのまゝにしとき。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

牧師。　餘程妙だ、何うかしてゐる、狂氣にしてはあまり言が整つてゐる。女がゐる？何う云ふ人だらう？まさか此の眞面目な信者に無暗に女を引きづり込むなどはありそうにないし。然かし女がゐる、それも下びた艶かしい語調で囁いてゐる。

青年。　何を言つておいでになるんです、何うか今日は是で失禮させて戴きませう。

牧師。　貴郎が強いて歸れと仰せなら、私とても歸ります。然かし兄弟、そう言はれる時に於きましては、私は貴郎の身の上を心配しなけりやなりません。貴郎は何んな顔をして平氣でそんな事をお云ひになるか、何んな顔をして平氣で女とそんな調子で物を云つてみへるか、私はそれを確める任務があります。

青年。　最う結構です、私の身の上は無事平穏の極みです、心の底まで歡ばしいんだから大丈夫の大丈夫です。――お引きとりを願ひます。

牧師。　益々おかしい、何と云ふ烈しい事だ、まるで物乞ひか何かをおつぱらつてゐる樣だ、人違ひ？否やたしかに川崎君に違ひない。それにしては棄てゝおけない。――あの川崎君、此處を開けますから。

青年。　いけない、可けません！僕の家ですよ、家宅侵入罪！。

女。　あんた、遠くから來たつて云つてるぢやないの、上らした方が好かなくつて、妾見たいわ何んな人だか。（笑って）貴郎の事を兄弟兄弟つて言つてるわねえ、何故です。

牧師。　あれが惡魔の聲だ、それにしても不思議だ！。

青年。（女に）兄弟だらうよ、お互に神の子キリストの手下だつたんだから兄弟だらうさ、四海同胞つて云ふやうなものさ、ふうちやんとも同胞だらうよ、そのうちに動物同志みんな兄弟つて云ふだらう。

牧師。　川崎君私は何うしても心配だ。君はどうかしてゐますよ。

青年。（漸く冷靜に）松田さん、最うお歸りになつた方がようございます。然し此の次でも今日のやうに御歸しはしません、時としてはまた悠つくり話しませう。

牧師。　別らない、何うしても別らない。では川崎

君、此方へ一寸御顔を出して下さいな。

女。そうおしなさいよ貴郎、可哀想ぢやないの。

青。(女に)何に大丈夫さ。(障子の方へむいて)其處へ出るのはわけない事ですが此處に女一人またして置くのは忍びませんからお斷はりします。貴郎は好い日にお出でになつた、何うせ一度は打つかる運命ですからねえ。そう何時までもいつまでも女の來る日と貴郎のおいで下さつて祈つて下さる日と喰ひ違つてばかりは居りませんから。

牧師。成る程。成る程。そうでしたか。驚いた！然し仕方がない。(激して)然しそんな位なら洗禮まで受けなければ好かつたんですねえ。

青年。此方の申し上げたい事です。私も始めて讃美歌を聽きに貴郎の御支配になる聖らかな敎會へ上つたとき、まさか洗禮まで强請されるとは思ひませんでしたよ。然しあの夜の氣分は最う一度欲しいやうな氣もします。決して個人として貴郎を惡みも疎みもしませんから時々お話しにお出で下さい。今日の事は私としては何も驚く事ではなく遲かれ早かれ逢着を豫期してゐたんです。神が特別の好運を與へて下さらない以上は。今日まで喰ひ違はせて下さつたゞけで、私は相當に神に感謝してゐますよ。

牧師。神と云ふ言を止めろ！成る程別つた。あゝ神樣、貧しき僕は恐ろし罪を犯しました、恐ろしい者をあなたの御前にお伴れ申した僕をおゆるしあらんことを。エーメン。

青年。ハレルヤ。

牧師。恐ろしい奴だ。

青年。又時々讃美歌を聽かして戴きに上ります。

牧師。馬鹿な事を！決して……。(去る)

青年。到々行つちまつた。然し好い人なんだよ、俺はあの人と話してゐると好い氣持がするんだ。

女。そんなら何故上げてあげないの、よく云へるわねえ、あんな非道い事が。罪よあれぢや。

青年。けれ共ねえ、入れてやつてお前さんを見せてやつたら猶あれは心を痛めるよ、それに此の室の樣子を見せたら、その方が何の位罪だか知れやしない。(大正三年三月中旬)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

胡麻鹽頭

貝塚 澁六

■本號には大杉君が僕の人物を攻撃した一文を書いたと云つて、其の原稿を僕に見せた。ザツト一讀した。それに對する返事としては、猶よく讀んでから更に次の號に何か少し書く事になるかも知れぬ。

■然し本號の本欄に何も書く事がなくて困つて居た所だから、矢張りそれに關して思ひつき次第少し書いて見る。

■大杉君と僕との間に意見の相違のある事は、赤旗事件以前から既に明瞭になつて居た。然し僕は成るべく多くの人と提携しようといふ態度であつたし、大杉君と雖も提携の出來るだけは提携しようといふのであつた。

■千葉から歸つて來た當座、二人でゆつくり過去將來の事など色々話した時、思想の差異は差異として、今後行ける丈は一緒に行かう。或時は別れもしよう、又或時は更に一緒にもなろう。何れ運動が盛んになれば自然多少の喧嘩もする樣な場合もあらう然し其時でも、お互に今話した心持を忘れずに、一時の喧嘩は一時の喧嘩、長年月に亘る大体の提携は大体の提携として、其時々の處置をして行かうではないかと。

■こんな樣な譯で、『近代思想』の紙上にも僕は常に手傳をして來た。そして成るべく諸君の邪魔にならぬように、成るべく餘り直接に差異點を接觸させぬように心がけて居た。

■然るに大杉、荒畑の二君は、『近代思想』の號の進むに連れて、大に其の平生の蘊蓄を發揮し、光彩陸離、機鋒亦頗る鋭利なるものがあつた。其の二君の進境に對し、其の諸君の武者振に對して、僕が多大なる感服の意を表した事は讀者諸君も御承知の通りである。

■然し僕は二君に對して深く感服すると同時に、亦頗る所見を異にする所のあつたのは無論の事である。それで或場合には、二君に對してと云ふよりは、寧ろ讀者諸君に對して、僕が必ずしもそれと同論でないと云ふ事を、一應斷つて置きたいと感じた事もあつた。

■けれども、僕は今の所、大いに自分の主義意見を唱道するといふ立場に居らぬのであるから、『近代思想』の紙上で大いに二君と論戰する氣持にもならなかつた。それで只折々、ほんの片言隻語を以て僕の態度だけほのめかして置いた。

■所が、其の片言隻語の言ひ方が宜しくないといふので、今度大いに大杉君の詰責を受ける事になつたらしい。詰責は謹んで受ける。悪い事はあやまりませう。只『へちまの花』のシヨウ警句集の評の中に擧げた警句は、特に寒村君にあてつけるために選んだのだらうといふ推測は、少し考へ過ごしで、僕の方ではそんな深い注意を以てあの句をゑりだしたのではなかつた。

■將來我々の運動がどんな風にして起つて來るか、今では殆んど想像もつかない有樣であるが、其の混沌たる今の時に當つて、こんな分派爭ひめいた事をするのは僕の甚だしく不快に感ずる所である。そして若し其の不快な事を生ぜしめた原因が僕の態度言行の中に在るとするならば、それは實に申譯のない、恐縮千萬の次第である。

■それで今後にも、僕は本誌の紙上に於いて餘り多く理窟を云はず、好い加減な馬鹿口でも叩いてお茶を濁して置かうと思ふ。

■聞けば『近代思想』も近々何とか一變形をするそうであるが、其の變形後に於いて諸君と僕と果してどんな風に道づれになれ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ろものやら、今から一寸と判断しかれる。僕も遠からぬ中に何か少しまじめな刊行物を出そうといふ考がないでもないが、由來先の事は當にならぬ物と相場が極つて居る。

■賣文社の内部にも、此頃少し悶着があつた。社員の四五人間にちよつと喧嘩があつて双方の關係者が自然皆退社した。それを機會として近日組織上に一改革を施すとにした。即ち、賣文社は今後僕と白柳秀湖君との二人の經營とし、近日事務所をどこかに移し、僕自身は其の事務所に住みこみ、一二の事務員の外、別に社員といふものを置かず、從來の關係者諸君には總て特約執筆家若しくは社友として援助を乞ふ事にした。然し外部に對する營業の方法、手續、實質に至つては、少しも從來と異なる所はない。それにつき、今更斷るまでもない事ではあるが、賣文社は僕等が衣食の爲にする純粹の營業であつて、主義とか運動とかいふものには何等の關係もない事を明記して置く。勿論、關係者の中に社會主義者、若しくはそれに近き人々の多いのは事實であるが、それは只知人友人としての關係であつて、其他に何の意味もない。

■イヤ、こんな商賣の廣告見たいな事に此の紙面を費しては惡いが、そこは讀者中の古いおなじみに僕等の消息を御報知する一端にもなる事と御許しを願ふ。

■『へちまの花』は賣文社の改革に係はらず、矢張り續けてゆく積りです。然しあれはほんの引札がはりのおもちや雜誌です。若しあんなものに幾らか望みを屬して御覽下さる方があるとすれば、それは誠にお氣の毒にもあり、心苦しくもあります。其段は特にお斷り致して置きます。

■或人から、『近代思想』は眞劍に書いてあるが、『へちま』はふざけた事ばかりで物足らぬといふような投書がありました。如何にも御尤の次第です。然し『へちま』は元來の性質上、どうもそういふ御要求には應ずる事が出來ませぬ。其邊は惡しからず御見のがしを願ひます。

■此間英吉利の石川三四郎君から『人と超人』の誤譯を一つ指摘して來た。それは『ブリクストンの別莊』云々といふ個處で、あれは別荘ではなく、棟割長屋の事だらう、原語は多分 Villa だらう、ブリクストンは其 Villa 即ち長家ばかりある處だと教へてくれた。どうも人間一度洋行しないと駄目だ。

平民の叫び

一千七百九十二年、佛蘭西の平民はかく歌ひつゝ、街路を練り歩いた。

おお、平民の叫ぶところは何ものぞ。
彼等は凡ての平等を求む。
貧者は最早賤しき悲慘の中に在らざるべく、
怠惰なる富者は逃れ去らざる可らず。

おお、平民が求むる處は何ものぞ。
彼等はパンと、鐵と、鉛とを求む。
鐵は彼等の復讐に勝たんが爲め、
鉛は吾等の仇を斬らんが爲め、
パンは吾等の友を養はんが爲め!。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『婦人解放の悲劇』

榮

伊藤野枝氏の新著『婦人解放の悲劇』を讀んだ。らいてう氏の序文に據れば、婦人問題には『人間としての女子の權利と女子としての女子の權利とは到底相容れないものゝやうに考へて只人間としての女子の權利のみを主張する婦人問題と、女子としての女子の權利こそ人間としての女子の權利であると兩者の間に一致を認めて女權を主張する婦人問題との二つ』があると云ふ。

けれども此の『人間としての』とか、『女子としての』とか云ふ事が、婦人問題又は人間問題の先決問題なのだ。

そして此の先決問題の不明瞭な所に、らいてふ氏の平素の主張の不明瞭と、及びエレン、ケイとエンマ、ゴルドマンとを彼の後者の婦人問題論者の中に同列に置いた不明瞭とが起因する。たとへばらいてう氏は、『男子と同じ社會的又は政治的權利を要求する』のを、彼の前者の婦人運動だと云つてゐるが、エンマ・ゴールドマンも亦等しく之れを要求してゐる。エンマ、ゴルドマンの女子参政權運動者と異なる所は、『男子と同じ』と云ふ言葉の意義が全く相反してゐる。女子参政權運動者等は、在來の男子の所謂政治的仕事を人間必須の仕事と認めて、女子も亦男子と同じく此仕事に與る事を要求する。然るにゴルドマンは、此在來の男子の所謂政治的仕事を人間の仕事として否認し、從つて男子も女子も共に此の仕事の破壞に與らなければならぬ事を要求する。

そして猶ゴルドマンは、此の破壞と自己の内的革命とを同一視し且つ同時に實行せんとしつゝあるのだが、エレン・ケイに至つては、たとへば彼の政治などを人間の仕事でないとして、直ちに其等のものゝ破壞を企てると云ふやうな思想はない。又エレン・ケイは主として人生を戀愛の方面から觀た。ゴルドマンは主として經濟と政治との上から觀た。これ等の諸點は、わかり切つたやうな事ではあるが、それを餘程明白にして置かないと、新婦人論の眞の概念が得られない。らいてう氏や野枝氏の主張に往々甚しき矛盾を發見するのは、此等の諸點が本當にはつきりしてゐない所から來るのではないかと思はれる。

『婦人解放の悲劇』は、此のエンマ・ゴルドマンの三論文、婦人解放の悲劇、結婚と戀愛、少數と多數、及びエレン・ケイの戀愛と道德の四篇を飜譯し、更に此の兩女史の小傳を附加したものである。

最初、殆んど取りとめのない程の漠然たる產聲をあげた青鞜社の諸君、殊にらいてう氏が、稍々其の婦人論に目鼻をつけ出して來たのは、氏がエレン・ケイの著書に親しむやうになつてからの事だ。恐らくば氏の多少强い個人性が、氏の久しく親しんだと云ふ禪的思想と禪的生活とによつて、更に其の孤獨の權威を感じ、又或る戀愛から得た經驗によつて、益々其の强き權威を感じ、而して猶多量の影響を近代文學の上から感受して、それがエレン・ケイの自己完成論と戀愛論とに甚しき共鳴を覺えさしたのではあるまいか。

らいてう氏を殆んど知らない僕は、只だ彼の禪と云ふ事によつて、氏の生活なり又思想なりを批評する興味を持つてゐる。氏の思想の時として甚だ神韻漂渺たる、又多少社會革命と云ふやうな氣がありながらも猶自らを獨り高くして自己革命のみに臨み止まれる如き、素より他からも起因する所はあるに違いないが、彼の禪から來た影響が多分にあるやうに思はれる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

野枝氏は此のらいてう氏の影響を受けた人である。氏は先づエレン・ケイの戀愛と道徳を飜譯した。若い、そして强烈な戀愛を經驗した氏としては、當然の事である。しかし野枝氏はエレン・ケイに對して、『自分は彼女の思想の中に、自分達と同じ系統をもつた意見を發見し彼女の議論に共鳴する或者を見出す事は出來る』が、しかし『自分にはそれ以上に彼女に親しみを持つ事は出來ない』と云つてゐる。氏はエレン・ケイに對して猶不滿足なる、偉いなる何物かゞあつたのだ。野枝氏はやがてエンマ・ゴルドマンに走つた。そして此ゴルドマンに對しては、『自分は彼女の小傳を讀むにあたつて自分のもつた大いなる興味と親しみと熱烈な或る同情と、憧憬を集注させて、いろ／＼な深い所から來る感激にむせびつゝ讀んだ』と云つて、其の感激と彼女に對する稱讚とを二頁あまり續けてゐる。

僕はまだ、らいてう氏のエンマ・ゴルドマンに對する思想の如何を、全く知る事が出來ない。けれども氏の平素の議論から想像すると、或は野枝氏程の同感は持ち得まいかと思はれる。そしてゴルドマンによつて『まだ自分達はやつとこの頃意識が動き出したばかりだ』と自覺した野枝氏は、此點に於て、或はらいてう氏を多少追越してゐるのではないかと思ふ。

僕は、僕等と同主義者たるエンマ・ゴルドマンに、野枝氏が私淑したからと云ふので、直ちに氏をほめ上げるのではない。かう云つては甚だ失禮かも知れんが、あの若さでしかも女と云ふ永い間無知に育てられたものゝ間に生れて、あれ程の明晰な文章と思想とを持ち得た事は、實に敬服に堪へない。これは僕よりも年長の他の男が等しくらいてう氏に向つても云ひ得た事であらうが、しかしらいてう氏の思想は、ぼんやりした或所で既に固定した觀がある。僕はらいてう氏の將來よりも、寧ろ野枝氏の將來の上に餘程囑目すべきものがあるやうに思ふ。

野枝氏は其の實生活の上から、殊に其の戀愛の上から『一歩、二歩、三歩と次第に深く進むにつれて、根底に横はる性の問題を始めとして、經濟問題、倫理問題、その他さま／＼の社會問題に、自然と自分の眼を轉じなければならなく』なつた。けれども野枝氏は一方に『かの短髮の露西亞少女等を考へさせ』られてゐると同時に、他方に『自分達は今なるべく社會との交渉をさけてゐる』と云ふやうな、眞に其等の諸問題にぶつかつて行く事を遠慮してゐる。しかし此の遠慮もホンの一時の事らしい。『自分達のやうなわがまゝでぢきゝキになつて腹を立てたり、癪に障つたり、苦しがつたり、落膽したりするものには、とても今の社會に妥協して、あきらめて easy-going な太平樂を云つて生きて行けない』からだ。それで『全然沒交渉な生活をするか、進んで血を流すまで戰つて行くかどつちか』になるのだが、『然し自分達は輕はづみに飛出して犬死はしたくない、で、イヤ／＼ながら我慢して先づ今の處なるべく沒交渉の方に近い生き方をしてゐる』のだと云ふ。

これが若し多少年とつた利口な人の云ふ事だと、僕は直ちに其の虚僞と誤謬とを喝破したいのだが、年若い正直な野枝氏に對しては、默つて此の崇い心の醗酵を待つ。

僕は野枝氏の譯書『婦人解放の悲劇』に就いて、殆んど全く其の內容を語る事が出來なかつた。しかし日本には珍らしい近來の良書として、特に本誌の讀者諸君には、ひても其の一讀を奬めたい。（金六十錢 本橋檜物町東雲堂）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

子供の間

寒村

冬の夜である。外は燒くやうな、斬るやうな霜と、冷たい風、まるで西比利亞だ。そして室内は？ 室内は紐育だが、その寒さは、外と些とも變りは無い。茲に住んでるのは猶太人の股引製造職工であるが、苦しい、殺すやうな貧困が、隅々から覗いて居る。股引製造工は、いま同盟罷工をし居るからなのだ。

罷工者は集會に往つてるので留守だが、その妻は火の傍に座つて何か縫つて居る。同盟罷工をやつて居る夫を助ける爲めに、近所の人の衣服の繕ろひをやつてるのだらう。火はもう消えかけて居る。彼女は明らかに寒さを感じたに違ひ無いといふのは、暖爐の蓋を開けて中を見て居るからだ。そして深い、重い嘆息をついて、空になつた石炭箱を悲し氣に眺めたが、また心配さうに、呆然としたまゝ坐つて居た。

それでもまだ室内である。只だ風のみは凍つた窓硝子を打ち、到頭、マンテルピイスの上の煙突を吹き飛ばして、悲哀傷心の號泣をあげた。まるで彼もまた、同盟罷工をして居る股引製造工の、悲しい心を持つて居るやうに。

『母ちやん！』子供の呼ぶ聲が聞へると、母は仕事を投げ出して、寢室に駈け寄つた。そこには、三つになるシリラといふ娘が寢てゐた。シリラはまるで襤褸の海の中に隱れて居たが、それを悉く刎れ退けて、寢臺から出やうとした。母は再び、子供を襤褸に包まうとしながら云ふ。

『これこれ、何處へ往かうかとするのサ。』

『母ちやん、あたいを暖爐の傍へ連れてつとくれよ。寒くつて仕やうがないからサ。』

『暖爐の傍だつて寒いんだよ。』母は猶も其他の襤褸で子供を包み、その傍に座つて寢かしつけやうとした。

『れんれんよう、おころりよ、シーやはいゝ子だ、れんれしな。』

『あたいを暖爐の傍へ連れてつとくれよ。』

『だつて、シーラ、彼處はそりや寒いんだよ。』

『石炭を入れりやいゝじやないか。』

『可愛いシーラや、石炭が無いんだよ、些つとも。』罷工者の妻は嘆息するやうに云つた。

『うゝん、あるよ。』

『否え、無いんだよ。石炭箱を見せてあげやう。』

母は臺處に往つて、空の石炭箱を持つて來て、シリラに示した。

シリラは箱の中を眺めて、子供らしい嘆息をついた。

『ほんとに些とも無いんだね。』そう云つて子供らしい顏に、眞面目な悲しみの色を堪へた。

『ほんとに些とも無いんだよ。』母もまたくり返した。

『些し買つといでナ、母ちやん。』

『だつて、お金が無いじやないか。』

『一錢も？。』

『あゝ、一錢だつてあるものかね。』

『父ちやんは、お金を持つて來ないの？』

『あゝ、シーラ、父ちやんは持つて來ないのだよっ』

『何故サ？』

『何故つて、今は同盟罷工だからサ。』

シリラは悲し氣に、物欲し氣に、母を眺めた。然し彼女には母の云つた事が解らなかつた。同盟罷工とはごんなものか、まだ知つては居なかつたから。

『おやすみよ、シーラや。』

『母ちやん、何か食べたいよ。』

『そう、ぢきあげるよ。』母はまた臺所へ往つて、パンを一片切つた。それから戸棚を探したけれ共、何も見付からないので、また靜かな、深い嘆息をして、引つ返した。

『それ、なあに？』

『パンよ！』

『バタが付いてるの？』

『あゝ、バタが付いてるよ。』母は子を欺そうとして、そう答へ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

た。シリラはパンを取つて、すぐ悲しい僞はりを發見した。そして頭をふつて、食べやうとはせぬ。

『いや、是れ。』

『何故サ、シーラ！。』

『バタ塗つて頂戴よ。』

『いま丁度無いからネ、明日、塗つてあげるよ。だから、今はそれで我慢しとき。』

『いや、是れいらない。』

『それじや、母ちやんも知らないよ。』

『お夕飯食べさせとくれ。』

『お夕飯はありません。』

『スープと肉をお呉れよ。』

『ありません、無いのですつたら。』母はその眼に涙を湛へて、子供に接吻しながら、くり返した。

『じや、バタを塗つて頂戴！』子供は再び、前のやうに云ひ張り始めた。

『ネ、シーちやん。母ちやんは、ありさへすれば、何時でも屹とあげるじやありませんか。如何してそう聞きわけが無いの？』

然し、シリラは信じやうとしない。そして、戸棚を指しながら强請つた。

『じや、御覽！　見せてあげるから。』母はこう云つて、戸棚から空のバタ壺を取出して、子供に見せた。シリラは如何にも物欲しそうに、空しいバタ壺を眺めて居たが、やがて再び、身も魂も引き裂くやうな嘆息を泄らした。

『バタまで些とも無いんだれ、母ちやん。』子供は手を絶望したやうに動がして、悲しそうに云つた。

『あゝ、些とも無いんだよ。』そう答へた母の聲は、涙に濕れるものゝ如くであつた。

『一錢も無いんだものれ。』子供は賢しげに說明した。

『あゝ、もう一錢も無いんだかられ。』

『父ちやんてば、些ともお金を持つて來ないんだものネ。』

『あゝ、父ちやんが、お金を些とも持つて來て呉れないから。』

『どうして？　母ちやん。』

『だから、さつきも話したじやないか。父ちやんがネ、同盟罷工して居るからよ。』

子供は暫らく默つて居たが、突如として尋れた。

『ストライキつて、誰れなの？』

『誰れでもおりやしないよ、同盟罷工つて事なんだよ。』シリラには、それでもまだ解らぬと見へて、また聞き返した。

『それは、一體何なの？お化け？』

『否え、お前にはまだ解りません、子供だかられ。だけど、もつと大きくなると、解るやうになるよ。』

風は益々强くなり、殘酷に窓硝子を打ち始めた。家全體は慄えそして裂風は、痲痺した悲鳴のやうに響いた。シリラは愈々堅く母にとつ捉まつて、恐怖に慄へて居る。

『まあ、馬鹿な子だれ。何をそんなに恐がるのサ。』

『だつて、母ちやん。今のはストライキじやなかつた？』

『何云つてるの、あれは風じやないか。』

シリラは母に寄り添つて、聞いて居た。そして、乾いたパンの片を、ボソボソ食べ始めた。母の眼からは、涙か子供の頭上に轉び落ちた。シリラの眼からも亦、子供らしい涙が、乾いたパンの上に落ちた。

『母ちやん！』子供は急に叫んで、泣き出した。

『まあ如何したの？シリラ。何が悲しくつて、そんなに泣くの。』

『父ちやんは、何處に居るの。』

『あゝ、ぢきに歸つて來るよ。馬鹿だれえ、お前は。』

子供は、パンの片を持つた儘、眠つてしまつた。そして罷工者の妻は聲を飮んで泣いた。

喧嘩

徳永保之助

××印刷會社の校正室の內では、人が何事か言ひ爭つてゐるらしく、大きな荒々しい聲が、粗末な建築の壁や天井に反響する。黄色に塗られた板扉がピッタリ閉つてゐる上、凡ての音、響を呑み込んで了ふ機械の音のために、何の事やらさつぱり聞きとれなかつたが、丁度その時、內から髭をはやした一人の男が、一束の原稿を手にして出て來た。そして扉を一ぱいに開け放したまゝ、そゝくさと工場の方へ行つて了つたので、はじめて言ひ爭ふ人の姿も見え、その怒鳴る言葉もはつきりと聞くことが出來た。

『馬鹿！　手前生意氣だ、ろく〳〵字も知らねえ癖に』

かう云ふ男の顔は、惡烈な酒でも呷つたやうに眞赤に、額のあたりの筋肉がピク〳〵動いてゐる他の一人は痩せこけた、弱々しい、努めて落ついて物を言ふけれど、內心の怒りは相手の男より一層はげしそうだ。蒼い顔をして、ブル〳〵手をふるはしてゐる

『それは貴様の事だ、貴様がいくら强情はつても蹂躪のりんは艸冠の付く方だ、よく覺えとけ！』

『手前の言ふ事にや何の根據も無い』

『あるとも、大いにある、明日辭書を持つて來て見せてやる』

『オー持つて來てみせろ、艸冠の無い字にだつてふみにじると云ふ意味は立派にあるから』

『馬鹿！　俺は無いとは言はん、然し蹂躪とは形も畫もきまつた一の熟字だ』

『兎に角手前少し氣をつけろ！　他人の一旦校正したものを直す資格は手前に無い』

『貴様が何を知つてる！　職工上りのくせに』

『餘計なことを云ふな、片方しか無い肺が無くなつちまふぞ、氣をつけろ！』

『畜生、云つたな、モー承知せんぞ』

イキナリ痩せこけた男が、身体を投げつけるやうにして相手の男にとびかゝつた。今まで誰も止めるものは無かつたが、この時漸く二三人の者が立つて二人を引き分けやうとした。けれどこの時

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

既に瘦せた男は組み敷かれて、ポカ〳〵相手に毆られてゐた。工塲から活字を手にしたまゝ、職工が大勢ドャ〳〵やつて來た。そして部屋の內をのぞいて、頻りに面白がつて笑つたり、手をたゝいたりした。

二三人して漸々二人を引きわけた處へ、向ふ側の外來校正室から、高貴織の着物の上に、七子の紋付を着て、八字髭を生やした卅位の男が出て來た、そして戶口に集つてる職工らを押し分けて室內へ入つて來た。

『何事だ何事だ？』

『いえ、今一寸詰らぬことから毆り合ひが始つたんで………』

人の善い、年寄りの校正長が、自分がその當人でゞもあるやうに頭をかいて言譯した。

『一体どうして？』

『どうも困るんです。皆、每日の樣に一畫多い少いで言合ひするんで、殊にあの二人は平生から仲が惡るくて、………とうとう今日は毆り合ひになつちまつた。』

『毆り合ひまでする字は一体どんな字かネ』

喧嘩に勝つた男が何か言はうとすると、校正長が止めて了つた。

『いえ、外でも無いあなたの原稿の中にある字なんですョ』

『そうか、どんな字だ、モー分つたのか』

『えゝモーそれは分りました』

『そうか、兎に角僕の本は特に校正を嚴密に且つ迅速にたのむョ』

紋付の男は、さも得意らしい風で言つた。

『每日かうして僕がやつて來るのも、一つは出版の遲れてる爲もあるが、一つは成るたけ遺漏のないやうにしたいからなんだ。何しろこの一卷の論集によつて僕の名は政論壇上の權威となるんだからネ、喧嘩なぞせんで早くしてくれたまへ』

『えゝ、承知しました』

校正長は窓の傍の空いた椅子に腰を下して、苦しそうに咳をしてる瘦せた男をかへりみて、

『君達は困るぢやないか、每日言合ひばかりして、………君早くやつてくれたまへ』

瘦せた男は立上らうとして、はげしい咳と共に床の上につい痰を喀き落した、それは赤黑い血の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

に思はれる意識が眼をさましたのである。地球上の人間が知つてゐる肉体上又は精神上の法則は、今より數千年前に彼等は忘れ去つて了つた。地球の人間が神秘とする處は、彼等には平凡な事である。アークヴアッドは百三十五年間奇蹟に奇蹟を重ねて來た。絶えずかういふ巨大な星界人類の生活を繰返して來た。

併し彼の科學詩は尙ほ歌はれてゐた。其驚くべき行ひは尙ほつゞけられてゐた。彼は同じ仲間の眼の前で、これから後は世界はたゞオグの力によるのみであると言つた。オグとは火星の人が、解らない、未知の物を解く代數のやうな方定式である。火星の人はあらゆる現象の後ろに、物の存在を許すが、それを代數的にオグであると説明した。

二千五百萬の火星の住民は（火星の人間は、病氣とか、發育不全とか、不具とか、根本的に哀れむべき者ときまつた者は、美くしい夢を見させる藥を飲んで死んだ）アークヴアッドが最上の力と最上の慈悲とが直ぐ此世に行はれるやうにすると言つて以來、かうして三年間といふもの、有頂天になつて期待の世界の中に住んで來た。そして今では此事を、アークヴアッドの天才により、既に近づきつゝある天惠であると話してゐる。

アークヴアッドは天門臺の頂に上つて、其望遠鏡を眺めた。彼は火星の人の中でも殊に巨人であつた。背は九呎を越え顔は深い銅色に紅かつた。其顔から二つの世界、二つの力ある黒い太陽が輝いてゐた。彼の頭は大鴉のやうな黒い髪の毛に被はれてゐた。其顔は畦と、線と、皺のヴエニスであつた。火星の人はアークヴアッドの顔を世界地圖であると言つた。實際それは四萬の運河をもつてゐるヴエニスである。

夜は輝いてゐた。地球は北東に――閃々たる紫色の光を放つて輝いてゐた。アークヴアッドは其巨大な望遠鏡の力によつて、自ら多くの世界の支配者となつた。此望遠鏡は長さが二千呎で、レンズは直徑五百呎あつた。其の驚くべき力は、全く地球の人間の理解を越えてゐた。若しもそれを覗いた者は、たゞ沈默あるのみであつた――そして畏れ入るのみであつた。此望遠鏡は宇宙の星座のどの星でもすぐ眼の前に持つて來て、僅に其一小部分だけを見せるのであつた。アークヴアッドが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

これで木星の全部を觀測したのは數年前の事であつた。

彼はあらゆる星に――地球と土星とを除いて――生物の住んでゐないといふ事を發見した。併し地球はアークヴアッドの特別に研究した處のものであつた。彼は地球の主人であつた。五十年間彼の眼と腦とは其恐ろしい機械と一緒になつて、お隣りの星（地球）に住む生物の生活を解剖した。遠方の小さい紫光色の世界に於ける生活狀態は、如何なる地球の人間に於けるよりもアークヴアッドには親しく解つた。彼は絶えざる空間の間諜であつた。

彼は數年の間地球上の生活現象を熟考した。彼の論文と記録とは數百卷に滿ちた。之等の書物は花崗石の大廣間の大きな白布の上に投げられる地上生活の活動寫眞と共に、火星の神仙譚であつた。之等の活動寫眞は、アークヴアッドの發明で、フロングといふ驚くべき機械により、望遠鏡から直接に撮つた物である。最初の地球の活動寫眞は――活動寫眞その物は、火星の人にとつて數百年以前から娯樂のもとであつた――丁度亞米利加の内亂の時にあらはれた。地球上の總ての出來事はサムター要塞の砲撃から、タイタニック號の建造至る迄――何といふ仕合せな事だらう！　アークヴアッドの望遠鏡は、恰も夜地球に向けられてゐる爲に――火星の人にはよく見えて、しかも親しく知る事が出來た。彼等の活動してゐる場所に火星の人は顔を向けてゐた。戰爭と破滅とは火星の人にとつては理解するのが困難であつた。さういふ繪は彼等に限りなく珍らしい物で、又心を惑はす恐れであつた。かういふフイルムは子孫の爲に保存されてゐて、ダ・ウインチやレムブラントなどいふ地球上のあらゆるカンヷスよりも價が高いのである。東京、伯林、チムバクトウ、廣東、巴里などの生活は、火星人の共通の精神的財産である。

彼等は雲の狂氣じみた行動などは全く了解してゐなかつた。そして地球の都市の醜さは幻のやうに彼等の心を惑はす物であつた。例へば倫敦の怪しい珍奇さが、彼等の心に言ふ事の出來ない愉快な恐ろしさを泌み込ませるのであつた。

アークヴアッドが此夜望遠鏡を覗いた時には、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

レンズは紐育と稱する地球の面を被ふてゐた。レンズの直徑は、丁度其大都市を被ふて了つた。

彼は一時間ほど紐育を眺めた。『確かにさうだ』と、彼は呟いた。其顏はプロメトイスのやうな嘲りに輝いた。アークヴアッドが火星の人達に約束した大事件の生れる時が近づいた。

『おきめに成りましたか？』

アークヴアッドは見まわした。そして自分の後ろに、門弟で、しかも愛してゐる有名なアスターの立つてゐるのを認めた——立派なアスター、と彼は火星の人達に呼ばれてゐた。彼はまるでアークヴアッドの子のやうに見えた。たゞ其髮が紅い黄金色に輝いてゐるのが異ふばかりである。地球の人がもしアスターを見るならば、ダ・ウインチの『黄金色の少年』が顯れたといふだらうと思ふ。彼は火星の年で十五才であつた。しかし地球ではそれを三十才であるといふに相違ない。其發明と發見とは、もう彼を永久不死のものとしたのである。アスターの發明した物のうちで最も役にたつ物は、ディモス及びフオボスといふ——火星の二つの月の光を——火星の何處へでも勝手に導くとの出來る機械である。かうして町や家の中のどんな人工的な光の要求でも滿たしたのである。アスターの今一つのもつと立派な發明は、一種の透視（テレパシー）方法によつて——今では火星の永久の心性上の實であるが——それによつて、火星と土星との兩住民間の共通用語を創始した事である。彼は又これによつて、眼に見えない、第六又は第七ディメンションの世界を喚ぶ事が出來た。第四又は第五ディメンションなどはずつと前に他の科學者の研究し盡した處である。

『俺は決心した』と、アークヴアッドは答へた。『此名高い病點に關して私の書いた物はお前の知つてる通りだが』——望遠鏡を透してアスターに紐育を指示ながら、『こゝの人間は、もし彼奴らを人間とすれば……　……それとも俺が堅く信ずるやうに、單に墮落した一種の微生物かも知れないが、彼奴らは全く何等の智慧をも持つてゐない。殊にあの町のあらゆる生物は、理性や想像を欠いてるやうに見える。若しも俺が信ずるやうに、此の町の者にこゝに住んでる者のやうな發育不全の者を發見したなら』——大きな廻轉地球儀の中部亞弗

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

利加に於けるゴリラ地方を指ざして――『それ等の者をば全く無くして了つたらよいのぢや。見なさい、あの大きな塔に攀ぢ上る道化を、何といふ動作だらう。何といふ恰好だらう。彼奴らは總ての望みを投げ出して了つたもの〻やうだ』。

『先生、彼等の生活狀態も亦全く智能の欠けてゐるといふ事を示して居ります。無數の者が穴や棚の中に住んでゐて、其中へ機械的に這ひ込んだり這ひ出したりしてゐるやうに見えます。そしてごく少數の者が、吾々に似てゐる城を建て〻居ります――之等の少數の者は他の群集によつて生活してゐるやうに思まれます――つまり彼等を生きたま〻でも食ひ乾物にしても食つて居ります。馬鹿な事には之等の群集は少數者の食物となることを承知して居ります！　それであらゆる物が同等なのでせうか。彼等にとつては部分が全体よりも大きいのです』。

『彼奴らは未だ曾て俺等の相圖を見た事がない』アークヴアッドは言つた。『土星の人間はすぐ俺等に返辭をしたが、サーの蟲は……』――彼等は地球をサーと言つてゐた――『殊にあの町に住んでゐる奴等は一生を大きな塔を建て〻、やがて又それを壞す事に費してゐる。彼奴らは高く空を仰ぐ事は出來ないやうだ。俺は彼奴らの眼を見た事が無い！』

『結局何處にも良い處はないけれども』と、アスターが答へた。『たゞ一ヶ所、いつも私の心を惹く處がございます。そこには秩序のしるしがあつて幾らか美の意識さへもございます。』かう言つてアスターは、地圖の上の綠色の點を指した。それは地球で巴里として知られてゐる處である。

『それはテレテキス以外の地球に於ける唯一の智識のしるしぢや』――と、アークヴアッドは、中部阿弗利加のゴリラ地方をさしながら言つた――『併し之を何と説明するのぢや？』

アークヴアッドはアスターを從へて其部屋を横ぎつた。二人はアークヴアッドの個人として持つてゐる大活動寫眞室へ這込つた。彼はカンヴスの上に、全く理解する事の出來ない巴里の攻圍及び巴里一揆の光景を映し出した。

『火星の動物は、こんな殺伐な微生物と云はうか血を流す事の好きな滴蟲類と云はうか、それより

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ほかに呼びようの無い、こんな者よりまだずつと智慧がある。』と、アスターは呟いた。

『さうして彼奴らは、血を流す事や、死ぬる事を少しも氣にしないやうぢや。さうぢやないだらうか？』と、アークヴアッドは言つた。そして廣い段の上で手を振つて、巴里攻圍又は一揆の殺戮圖をまろび出させて、今度は巴爾幹戰爭の光景を映し出した。

『彼等は何をやつてゐるのでせう？　あんな生活をしてゐて彼等は何を目的としてゐるのでせう？』ブルガリア人の喜劇が初まつた時に、アスターは言つた。『御覽なさい、何といふ恐ろしい喜びと滿足とを買つてゐるのでせう。彼等はお互に內臟を斬りました。お互に壓潰した腦の中へ這入つて行きました。あれは吾々仲間の幼稚な大競技と云たやうな遊戲なのでせうか？それからあれをあの腦に大きな十字架をかけた人間が、頸から新月を懸けた人間を殺してゐるのを御覽なさい。』

（註、基督教國民たる歐洲人が、新月國民たる土耳古人を殺してゐるといふ意）

火星の人達の中では、巴爾幹戰爭の光景は、キシネフの虐殺に次で活動寫眞館中の最も呼物であつた。あらゆる人が地球上のどんちやか騷ぎの意味を考へた。併し誰もまだ滿足すべき解釋に達する事が出來なかつた。智識の淵叢たる多くの大學では、いろ〳〵な假說が立てられたが併しアークヴアッドやアスターと同じやうに、如何なる學者も適當な說明をする事が出來なかつた。彼等は透視法でもつて土星上のあらゆる事物を發見して、それで彼等を驚かした。地球上でも彼等はいろんな物を發見して、それに相圖を送つたが、それは笑聲の病的發作の中へ投げ込んだのに過ぎなかつた。一体あのサーといふ小さな紫色の星は――第三ディメンション界の顚狂院なのか、それとも空間にかゝつてゐる或る腐つた癌なのか、それとも又オグによつて發見せられた宇宙の諷刺なのか？

較べるものゝない地球上の光景は、火星の人達にとつて限りない樂しみの源であつた。彼等はそれを望遠鏡によつても見たし、又完全な活動寫眞でも見た。併し火星の人の眼が、その生物の行動を捕へた瞬間には――地球の人に對する火星の人は――そこに混惑と僻說と神秘と恐怖と、それか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ら哄笑とがあつた。

アークヴアッドの約束した大事件が、あちらこちらで囁きかはされた。それは彼が地球に對してそこに住んでゐる狂氣めいた虫の運命に對して、何かするといふ事であつた。

アークヴアッドとアスターとが話しあつてから、二十日の間火星の人達は何もしなかつた。それは大事件の行はれる日であつた。あらゆる種類の望遠鏡は用ひられ、ある者は活動寫眞を用意して觀測所にゐるアークヴアッドの相圖を待つてゐる。其夜になつた――星の多い夜で、限りもない星はきら〳〵と輝いてゐた。未だ會て地球がこんなに美くしく輝いた夜はなかつた。其紫色の光はきらめき渡る及のやうに空間を進んで來た。

それは地球の人間の最後の日であつた。アークヴアッドは火星の眞夜中に彼等の死ぬる事を宣告した――火星の眞夜中は紐育市の午前十一時と同じであつた。地球が其軸で廻轉して、其面を太陽に向ける午前十一時に、殺伐な狂氣じみた馬鹿々々しい生物の感覺の失はれて了う凶鐘が響く筈である。

數年の間、アークヴアッドは此事について、慈悲深い方法をとろうと考へた。それを成しとげる方法は、勿論、火星の人にとつてはわけのない事であつた。殊にアークヴアッドにとつては容易な事であつた。之等の第四又は第五ディメンションの世界に住んでゐる巨人等の知つてゐる『力』のなかに、或る一つの物体――球(ボール)ともいふべき物――があつた。それを發射する機械は、アークヴアッドのみ操縦する事が出來て、『エレクトロキユート』の呼ばれてゐるが、それによつて一度此物体を與へられた方向に發射する時はあらゆる生物は死滅するのであつた。此物体は容易くエーテルを通過することが出來て恰も地球の大氣中を通過する電撃と同じやうなものであつた。此物体は何の苦しみもなく生物を殺し重力の法則を超絶して(重力の法則は、火星界ではアークヴアッドの生れる五萬年も前に棄てられて了つた)其瞬間に、目的物を不動のまゝ硬化する力を持つてゐた。

アークヴアッドの計畫は、地球の人類をエレクトロキユートで殺して、それを立像にして、一時に悉く木乃伊にするといふのであつた。突然地球

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

上の虫を石に化して、其大博物館を五十年間火星の同胞の眼に曝し、その後『フイ』といふ極めて微妙な物体でもつて、突然全体を瓦斯とエーテルとに分解して了ふ――これが第五ディメンシヨンの慈悲深い、宏大な力のあるエヂソンたるアークヴアッドの、此夜行はうとする考へであつた！

事件は、火星の快樂殿の活動寫眞に撮しとられなかつたらうか？　光の伏兵！硬化せられた生物の幻像！　明日といふ者の永久の休止！　生きてゐる姿で科學の神にとらはれた一寸法師の世界！それ等の二十億の空氣を呼吸する動物は、もう空氣を飲まないだらう！　夥しい、そして限りもない、地球の人間の夢は、最早永久に斷たれて了つた！　哀れな鐵を使つてる動物は、僅に五千萬哩を隔てた處から宣告されて了つた！

ほゝ笑むでゐる髑髏（ゴルゴタ）野！　何といふ無意味な虐殺だ！　生命が細胞のまゝ眼を廻した！

株式仲買人は打ち殺されて、五十年の間、大きな眼をあけて、スタンダード石油株の價格表を眺めてゐる運命となつた。

熱心な宗教の信者は、其膝を低く藉いて、其眼を永久に無力の神のシムボルに注いでゐなければならぬ。

紐育、巴里、伯林、倫敦、東京、カルカッタなどの、五百萬の徒歩者は、もう決して其使ひの目的を達する事は出來ないだらう。

佛蘭西、獨逸、伊太利、英吉利、日本などの練兵塲に於ける百萬の兵隊は、西の隅で自動機械のやうに廻轉して、餌をつゝかうとする鴉のやうな錫の兵隊になつてしまつた。

娼妓はもう二度と金を儲ける事は出來ないだらう。牛肉の値を高くしようとする行動をとつて、宗教家達を顫へさせた富豪は、書齋の中にゐて、其爆發力の永久に頭の中で凍つて了つた社會主義者と同じやうに、今や全く無力である。

『時の與へられたる瞬間は、時その物の概畧である。』と、或る時アークヴアッドは、立派な形而上學の一研究に於て書いた。『何となれば、眞に存在する時の只一つのポイントは、今である、現在の此瞬間である。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

地球上の生活が——サーに住む生物の生活が——火星の望遠鏡又は活動寫眞のフィルムによつて、物凄い併し心を迷はす繪として見えるのも、實にこの絶對の眞理のためである。地球の人間が硬化して其進化をとゞめたのは——先づかうであつた。そして慈悲深い、全能のアークヴアッドにとつては、之等の生物を殺したのは、其將來の苦しみを短くせんがためであつた。

斯くして辻褄のあはない生物、愚鈍な生物は、不思議な生物、立派な生物となつたのである。

（Benjamin De Casseres）

慈善家

寒

富豪四菱九郎右衛門君が、ある朝邸内の庭を散歩して居ると、薄汚い服裝をした男が、松の根方に寢て居た。俺の庭へ無斷で！とは思つたが、傍へ寄つて聞いた。

『如何かしたか、體でも惡いか、食へなけりや金をやらうか、俺は知つても居やうが、四菱九郎右衛門だ。』

男は、何か呟やきながら、クルリと背を向けて答へた。

『俺は眠いのだ。濟まないが藪つ蚊を追つて吳れ。』

慈善家はすぐ雇人を呼んで、此の恩知らずを追ひ出さした。

■三太郎の日記（阿部次郎著）

明治四十一年から今年正月までの六ヶ年に亘る著者の「內面生活の最も直接な記錄である。」而して『文壇の社會問題』の項中に、發賣禁止の橫暴、脚本檢閱の峻酷を聞く每に社會的興味を屢々覺醒されながら「自己の家を築くに忙しき私の心は此社會的興味を鎭壓し冷笑して」個人的興味の中に「不安なる睡眠」をしてゐる哲學者の記錄である。文壇に生活し呼吸して居ながら文壇の社會問題に對してさへも回避せんとする著者の心は『自己を語る』と云ふ文中に能く理解されるが從つて又此の一卷に對する我々の興味は冷却されざるを得ない。但し此れは著者の自序の注意に從つて日記中の最後の一文を讀んだ立言であるが、通讀する人に對しては此の心境に至つた著者の六年間の過程を見る事に多くの興味を與へるであらう。『斷片』『三太郎の日記』及び小說三篇と『人生と文藝』を收め附錄に「若きゴーホ」「ゴーホの藝術」の二章を添ふ（二郎）（定價金壹圓、日本橋區檜物町九東雲堂）

■太陽の子（福士幸次郎著）

詩集である。「スコップを握り、生きるか死ぬかの瀨戶際を渡」つた著者としては餘りに空虛な聲である。『娼女』の如きは福田夕咲君の作に喚び醒まされた魂で歌つたものかも知れないが、斯かる詩に何の價値があるか。『勞動者に與ふ』は勞働者といふものが或る新らしき人々（例へば著者の如き）の象徵であらうが、其の著者が、此一卷に現はれし所を以て見れば勞働者では無く矢張一個の詩人である。（二郎）（金壹圓、麴町區平河町五の三六洛陽堂）

■反響（植竹書院發行）

漱石氏の門下阿部、安部、森田、生田四文學士が中心となつて新たに創刊された評論雜誌である。が、內容の雜駁が四氏の一層の努力を欲求させる。（二郎）（定價十五錢。）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大久保より

寒

■下らないお喋べりを散々して、疲れきつてしまつたやうな感じが、此の頃頻りにする。過去の二十ヶ月は短かい時間では無かつたが、『近代思想』で果して何を云ひ、何が書けたかと思ふと、何も無い。それは只徒勞に過ぎなかつたとしか思へぬ。

■然し、此の倦怠から脱れて、元氣を恢復して、そうして新らしい本當の事業に取り掛るには、まだ四回も本誌を出さなければならない。此の間は、可なり苦しくもあろし、また可なり大切でもある。

■本號の体裁は大變まづく出來上つた上、編輯を締め切つたのも隨分遲かつた。發行期日も、隨つて多少遲れる事と思ふ。何しろ、皆ばかに急がしかつた處へ、原稿が些とも集まらなかつたのだ。

■大杉夫婦の病氣は、此の頃大分よくなつた。そして大杉は、『近代思想』に書いた論文と、外二三の雜誌に載せた物とを纒めて、近々某書肆から出す筈で、目下その整理にかゝつて居る。佐藤緑葉の『人間屠殺所』も、近日泰平館から出る。

■寄贈雜誌■

創造　自畫像　第三帝國　生活と藝術
一隅　南方の花　女學雜誌　へちまの花
エゴ　帝國文學　新公論　實業之世界
水甕　反響　彫像　人生と表現
青鞜　新佛教　眞人道　ダイヤモンド
新潮　水郷　塔　ナショナル
民聲　新眞婦人　番紅花　早稻田文學
假面　現代詩文　關西藝術　內外教育評論
創作　婦人評論　英語青年　東京魁新聞
黎明　文章世界　公友新報　鑛業及鑛夫
銀聲　東京評論　村落通信　ウオールド
水都　ローマジ　新思潮　都會藝術
獨立評論　支那と日本　名古屋經濟雜誌
日本婦女新聞　日本エスペラント

■四月號目次■

四月(短歌)……安成二郎
主觀的歷史論(評論)……大杉榮
三月の評論(評論)……安成貞雄
くらやみに(詩)……德永保之助
生活の欠伸(感想)……寒村
胡麻鹽頭(雜錄)……貝塚澁六
主の家にて(小說)……荒畑寒村
人間屠殺所(小說)……佐藤緑葉

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。
■郵劵代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正三年四月三十日印刷納本
大正三年五月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社內
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　福音印刷合資會社
東京支店

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

地六社復刻版

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

生活と藝術

五月號

■内容■

伊庭孝……新しき劇竟に新しき劇に非ず
——桝本清に與ふる書——

大杉榮……籐椅子の上にて
——土岐哀果を論ず——

西村陽吉……小人の繰言

土岐哀果……街上不平

青年諸氏……嚴選せられたる詩歌

■定價一册十八錢■

■送費一錢■

發行所 日本橋區檜物町九番地（振替東京五六一四番）東雲堂書店

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第二卷
第五號

エゴ

五月一日發行
定價二十五錢

第五月號

目次

戰ひ（感想）　千家元麿
手紙三つ　武者小路實篤
愛の自我（感想）　千家鐵麿
罪を悔ゆる男（小說）　岸田劉生
詩十一篇　佐藤惣之助
ミケルアンヂエロ（ロマン、ローラン）　長與善郎譯
六號雜感　四一人

挿畫

永遠に創造されたる太陽と月　ミケルアンヂエロ
クリストとマリア　同
ダビッド　同
俘虜　同
光と陰の創造（部分三）　同
ラヘル　同

編輯所
發行所　東京市牛込區新小川町三丁目三十一番地　エゴ社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

特價廿五錢

郵税金二錢

假面

第三卷第五號　五月號

□露西亞文豪ソログープ（口繪）

□星（評論メエテルリンク）……吉江孤雁

□死の勝利（戯曲ソログープ）……松永秋雄

□シンジ小品（愛蘭シンジ）……西條八十

□梨倶毘陀より（印度古詩）……増野三良

□稚子京丸荅之曲（戯曲）……森口多里

□春宵秘戯（長詩）……日夏耿之介

□露西亞國民文學の變遷（評論ブランデス）……瀬戸義直

□四月の創作評……□海外文藝概覽

假面社編

近代評傳叢書

第一篇 ストリンドベルヒ　加能作次郎

第二篇 ドストエフスキイ　瀬戸義直

本月下旬發行　袖珍頗美本

定價金五十錢　郵税金六錢

發行所　東京市外西大久保百三十一　假面社

發賣元　東京神田錦町一丁目十九　振替東京四一二三番　中興館

青鞜 V

定價 金二十五錢

郵税 金一錢五厘

■面目一新せる五月號■

男女戀愛の差別　エレン・ケイ　野枝

S先生に　らいてう

西川文子氏の「婦人解放論」を評す　野枝

ソニア・コヴァレフスキイの自傳　野上彌生譯

得たるいのち　西崎花世

糸のもつれ　小林哥津

お前の日記　伊達虫

附錄

動搖に現はれたる野枝子の性的特徴　小倉清三郎

イワノフ（チエホフ）　瀬沼夏葉譯

ト者の言葉　加藤みどり

反古から　原田琴

おもつてゐること　岩野清

短歌　葭・百合・琴

此頃の感想　らいてう・野枝・みどり

讀んだものゝ批評　田村俊 / 野枝・らいてう

編輯室より　らいてう・野枝

■編輯者　らいてう・野枝■

發賣所　東京市神田區南神保町一六　【振替東京一九三四四番】　尚文堂

京都帝國大學教授 法學博士 市村光恵先生著

京都帝國大學教授 法學博士 市村光惠先生著

時務剴切の必須書

國家及國民論

個人は社會に對して固より分數的單位に非ずと雖も「國家」てふ一語は吾人の生活の上に永久絶大の權威を語る者ならざる可らず、一國家の形成せらるゝや、深遠の意義と必然の科學的根據とあり、殊に世界に冠絶せる國家を有する我日本の如きに至りては、即ち之を根本の論より觀て更に別個の立論なかる可らず、我が國法學の泰斗市村先生、特に本會の爲に此一著を成さる、徒に論議の爲に論議するが如き乾燥枯淡のものに非ず、其據る處や遠大至微、其述ぶる所や平明透徹、而して時に興味の爲に熱せられんとするものあり。寔に時代凱切の一大著述也。

菊版四百餘頁
總布綴箱入美本
全一冊
金壹圓九拾錢
小包料十二錢

濟世治民の大寶典

社會德育及教化の研究

文學博士 中島力造
足立栗園 兩先生著

物質的文明は人の容易に模倣し得る所なりと雖も、精神的文明は之に反し、決して一朝一夕に他の模倣し得るものにあらず、蓋し其の由來する所遠くして且つ深く、而も國民精神の根柢に其の基礎を据ゆるを以てなり。思ふに我國今代の文明は、物質、精神兩方面に亘り、之を泰西文物の輸入に待ちしもの少からずと雖も、然も精神的文明に至りては、元來我に其の素養あり國民久しく其の德育の下に訓練せられ、以て明治維新に及びしものなれば、維新後の泰西思想の注入と共に漸次調和折衷せられてよく今日の効果を見るに至りしものなるべし、されば我國精神的文明の經過を研究する者は、また須く近世德育の由來する所を對尋せざる可からざるなり。著者此の見地より夙に此等德育方面の研究を必要視し、之に心を潜むること多年、遂に此大著を成す。章を分つ十五、節九十三、實例を擧ぐること最も詳密、之を觀れば、其自治的精神は却つて今時の昔時に劣るの感あり、而かも今や東京市の當局者は、卒先して德川時代の自治制を復活せんとするの意ありと聞く。本書の出づる亦時なるかな。學校社會家庭の教育の任にあるもの必ず一讀せよ。

菊判五百頁
總布綴箱入
全一冊
金貳圓
小包料十二錢

東京市京橋區南鍋町一丁目
隆文館
振替東京八五三番
電話新橋一七八〇番
同 一七八一番

近代思想　第二巻第八號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正三年四月三十日印刷納本（大正三年五月一日發行）
五月號　金十錢

ライオン齒磨

紛製・煉製・水製・子供用

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN